

- 道路

運転する凱歌、耳にイヤホン、本部からの指示を受ける。
本部「目標はP地点を通過、C経路で向かう模様、ポイントCへ急行せよ」
凱歌「わかった。」
カーナビ画面を見る凱歌。ハンドルをきる。

- 1211本部

通信機器の前、情報をやり取りする数人の男達
壁面の地図を見ているコー。
部下「C点からの狙撃はカーブの一瞬だけです。」
コー「何の問題もない。」

- ビル前

車が止まる。降りてくる凱歌。
鞆を持って歩き出す。

- 道路

疾走する車、運転席のきなこ。

- ビル屋上

屋上でライフルを手に立ち上がる凱歌。
顔を上げる。屋上に立つ鉄塔を見上げる。

- 道路

疾走する車、きなこ、標識を確認する。高速を降りる車。

- ビル屋上

ライフルを背に鉄塔を登っていく凱歌。
銃声、凱歌の耳元をかすめる弾丸。上を見上げる。銃で狙うRDの男A
銃を撃つ男A、弾丸を避け、片手で宙吊りになる凱歌。
鉄塔の裏に回り込み、上を見上げる。
イヤホンの声「ポイントC、到着したのか？」
凱歌「まだだ。」
イヤホンの声「早くしろ、時間がない。」
凱歌「わかってる。」
凱歌、時計を見る。非常用のロープを取り、上に投げる。巻きつくロープ。
ロープを握り、鉄塔を蹴りながら弾みをつけロープを登る。凱歌を狙い発砲する敵。
凱歌、鉄塔を蹴って大きくロープを揺らす。さらに大きく揺すり上げ、敵の頭上に飛び降りる。
銃を蹴り飛ばす凱歌。乱闘シーン。手すりに背中を押さえつけられる、凱歌。
首を締められ下に落とされそうになる。
チラッと下を見る凱歌、ロープを見つけ、じりじりと手すりをずれて行く。
凱歌、ロープを掴むと自身の身体ごと敵を手すりから跳ね上げる。
ロープに捕まり宙ずりになる凱歌、下に落ちる敵。

- ビル前

走る車、凱歌の車を見つけるきなこ。後ろに止まる車、降りてくるきなこ。
辺りを見回す。ビルの屋上、きらっと光るものを見つける。
慌ててその方向へ駆け出す。

- 鉄塔の上

銃を構える凱歌、ライフルのスコープから見る。重なるビルのすき間から見える道路のカーブ。

- ビル屋上

屋上を走るきなこ、上を見上げる。鉄塔の上へと視線を上げていく。
凱歌を見つけるきなこ。
きなこ「(呟くように)ホイさん...(息を吸い込んで叫ぼうとする)ホッ」
手で口を塞がれるきなこ。振り向く。きなこの口を抑え立っている、趙。
趙の手を振り解くきなこ。
きなこ「何をするんですか！趙刑事」
趙「静かにして下さい。彼の狙撃が失敗に終われば、これまでの計画が無駄になる。」
きなこ「如何いことですか？...警察がこの件にからんでいるということですか...」
「だから、王凱歌を釈放して組織に戻そうとしたんですね。」
「...彼にテロ組織のリーダーを狙撃させるために...」
趙「そうだとしたら如何しますか？」
きなこ「やめさせます。(趙を睨む)」

- 鉄塔の上
銃を構える凱歌

- 鉄塔の下

趙 「RDのリーダーが、1211と上層部との関係をネタに我々に揺さぶりをかけてきたのです。奴は1211の海外での上層部がからんだ武器取引の利権を自分達の手に入れようとして

いるのです。この件が表沙汰になる事だけは阻止せねばなりません。」

きなこ 「組織同士の争いとして片付けようとしているんですね...」

趙 「そういうことです。RDと言う集団は、まだまだ未熟な組織ですから。リーダー以外は、単なるテロリストの集まりにすぎません。狙撃が成功すれば、奴等は黙っていても1211の本部を襲撃し、復讐を果たそうとしましょう。」

きなこ 「どうして、それを私に...」

趙 「この件は、あなた個人がどうこうできるレベルの問題ではないので...」

きなこ 「彼を、利用して、そして、その後は...いったいどうするつもりなんですか？」

趙 「それは、成功してから考えましょう。彼はとても役に立つ人間です。

まあ、生きていければの話ですが...」

きなこ 「如何いうことですか？」

動揺して、上を見上げるきなこ。趙、きなこの鳩尾を殴ろうとする。かわして趙の腕を掴むきなこ。

きなこ 「何をするんですか！」

趙 「終わるまで、静かにしててもらいたいのです。」

きなこ 「いやです。」

趙、上着の胸に手をいれる、身構えるきなこ。鉄塔の裏から現れた刑事に、背後より殴られ気絶する。

- 鉄塔の上

スコープから見ている凱歌。照準の中入ってくる車、リーダーの顔に照準が合う。

- 鉄塔の下

倒れているきなこ、上を見上げる趙と刑事

- 鉄塔の上

引鉄を引く凱歌。発射するライフル。頭部に命中。車内、崩れるリーダー。周囲の男達、慌てている。

- 鉄塔の下

発砲音を聞く、趙。ゆっくりと立ち上がる凱歌の姿を見上げる。

趙、携帯を出す。

趙 「成功しました。」

話しながら、その場を去る二人。

- ゴルフ場

グリーン上、ボールとカップの距離を測っている高官、手に携帯。周りに数名の警護の男達

高官 「わかった。次の作戦に進んでくれ。」

趙の声 「わかりました。」

高官 「今度は、もっと意のままに動く人間をトップにした方がいい。」

携帯を近くの護衛に渡し、パターを打つ。

- 鉄塔の下

銃を背に降りてくる凱歌。倒れているきなこに気付き、抱き起こす。

凱歌 「きなこさん！」

きなこ、目を開ける。

きなこ 「ホイさん...」

凱歌 「どうして、ここに...」

きなこ、凱歌の背中のライフルを見る。きなこの視線に、立ち上がる凱歌。

きなこ 「撃ったの?...」

凱歌 「(きなこに背を向けて)...仕事だ。」

歩き出す凱歌。

きなこ 「(立ち上がりながら) 待って！」

立ち止まる、凱歌。

きなこ 「1211に戻るの？」

凱歌 「...」

きなこ 「ねえ、お母さんは無事よ。さっき、警察に救出されたの。」

凱歌 「(振り向いてきなこを見る) 本当に?...元気だった？」

きなこ 「眠らされていたけど、大丈夫だって...」

凱歌 「よかった。無事なら...」

きなこ 「だから、もう組織に戻る必要なんてないの。」

凱歌 「...」

凱歌、背中を向け歩き出す。

きなこ「あなたは、組織同士の潰し合いをさせるために、当局に利用されていただけなのよ。」
凱歌、立ち止まり頷く。
きなこ「知ってたの？全部知ってて、どうして...」
凱歌「1211を潰すためには...こうするしかなかった。(歩き出す。)」
きなこ「コー村木の所へ戻る気なの？」
凱歌「奴だけは、この手で倒す。」
走り出す凱歌、追うきなこ
きなこ「待って！」

- ビル前

凱歌ときなこの車がある。
車に走りよる凱歌、ドアに手を掛ける。
後ろから追いつく、きなこ
凱歌「ついて来るな！」
きなこ「いや！一緒に行く。」
凱歌「ダメだ、危険すぎる！」
きなこ「危険だから...一人では行かせない。」
凱歌「頼むから...君を...巻き込みたくないんだ。」
振り返ってきなこを見る凱歌。
きなこ「あなたと一緒に行く。...何があっても。」
凱歌「ほんとに何かあるかわからないんだ...生きて帰れるかさえ...」
きなこ「一緒に行かないと、またあなたはいなくなってしまう。もういやなの、あなたを探し回るのは...」
見詰め合う、凱歌ときなこ。微笑む二人。
きなこ、助手席のドアの前に立つ。
凱歌「とにかく、無理しないで、危なくなったら逃げるんだ。」
きなこ「誰にいつてるの？知ってるでしょ、わたしが強いって。」
凱歌「無茶なだけだ。(ドアを開く)」
きなこ「ああ、また、そんなこと言ってる。絶対、わたしのほうが強いんだから絶対...(ドアを開く)」
凱歌「強いから始末が悪い...」
きなこ「それ、どういう意味？あ、認めたね、わたしのほうが強いって、今認めたでしょ。」
凱歌「認めてない。...もう、わかったから、さっさと乗れ。」
凱歌、車に乗り込む。
きなこ「(ぶつぶつと) なによ、えらそーに...いつか決着つけてやるんだから... (助手席に乗る。)」

- 道路

走る車、中に運転する凱歌ときなこ
バックミラーに映る車
凱歌「来た！」
きなこ「追っ手？」
振り向くきなこ
凱歌「伏せて、撃ってくる！」
きなこ「うそ！」
リヤウインドを突き抜けて飛び込む弾丸、頭を伏せるきなこ。
きなこ、拳銃を取り出す。窓を開け後ろの車へ向け発砲(あたらない)
凱歌「へたくそ！」
きなこ「下手っていうな！(発砲、あたらない)」
後ろの車、窓から身を持ち出しライフルで狙う男。
男が発砲、砕けるリヤウインド、伏せる凱歌ときなこ
きなこ「あつばなー」
窓から狙うきなこ。
凱歌「ちゃんと狙って。」
きなこ「狙ってます！(発砲、あたらない)」
凱歌、きなこの足に手を置く。
きなこ「(怒った口調で) なに？」
凱歌「(ハンドルを指して)替わって。」
きなこ「ああ、はい。」
きなこ、ハンドルを握る。凱歌ときなこ、席を替わる。
車窓から顔を出し狙う凱歌、拳銃を撃つ。
タイヤに命中、回転して側壁にぶつかる車
前を向く凱歌。
きなこ「やりー」
凱歌「喜ぶのはまだ早いみたいだ」
きなこ「(凱歌を見る) えっ？」
凱歌「上だ。」
きなこ「上！」
上空に飛ぶヘリコプター。どんどん近付いてくる。ヘリの開いたドアから身を持ち出し
ライフルを構えている男。
きなこ「(上を見て)まさか...」

凱歌 「撃ってくる。」
きなこ 「(ハンドルを切ってよけながら) 勘弁してよ。」
凱歌、一瞬きなこを見てから、後部座席のライフルを取る。
弾をポケットから取り出しこめる。蛇行運転してヘリからの弾をよける車。
凱歌、ヘリを狙って撃つ。ライフルを持った男に命中。車の上に落ちてくる男。
ボンネットに落ちてから、道路に転がる。
きなこ 「きゃー！なに今の、人、人？」
凱歌 「(車が蛇行する) 落ち着いて。」
きなこ 「(割れたフロントガラスを肘で落としながら) もう、オープンカーだよ。」
凱歌 「乗り換える？」
きなこ 「(呆れ顔で) なにに？」
凱歌 「あっち(上を指す)」
低空飛行で追ってくるヘリコプター。凱歌、後部座席からロープを取ると車の上に出る。
ヘリコプターに縄を投げて巻きつけ、するすると登っていく。
きなこ 「(凱歌を見上げながら、呟く) 何してんだ？あの人は...」
凱歌、ヘリコプターの中に飛び込む。銃を向ける操縦士と揉みあい。突き落とす。
車の上に人が振ってくる。
きなこ 「きゃー、まただよ。」
凱歌、ヘリコプターから縄梯子を下ろし、来るように合図する。
きなこ 「(怒りながら呟く) 冗談でしょ、もぉー」
きなこ、窓から梯子を掴み飛び出る。きなこ梯子を上る。路肩にぶつかる車。
きなこ、ヘリコプターに乗り込む。
きなこ 「無茶苦茶だわ、何やってるのいったい！ 操縦できるの！」
凱歌 「ライセンスは持っている。」
きなこ 「(安心して) へー」
凱歌 「ただ...取ってから操縦するのは初めてだ。」
きなこ 「うそ(絶句)」
凱歌 「オープンカーじゃなくなったでしょ？」
きなこ 「オープンカーでもなんでもいいから地面走ってる方がまし！」
凱歌 「なんだ、そうだったんだ...」
きなこの声 「おろして～！」
飛び去るヘリコプター

- 1211本部屋上

本部屋上に着陸したヘリコプター、建物の屋上に降りる二人。
きなこ 「ここが、本部なのね。」
凱歌 「(頷きながら) コーの部屋は地下フロアにある。」

- 本体内

屋上から内部へ階段を下りていく、きなこと凱歌。
警備が二人を見つける。
警報が鳴り響く。1211の男達が現れる。
廊下を走りながら闘う二人。

- 本部1階

エントランス前に立つ二人。外から拳銃を撃ちながら入ってくるRDの男達
凱歌 「RDの奴等だ！気をつけろ！撃ってくる！」
凱歌ときなこ、弾丸をよけながら乱闘
落ちていた銃を拾って撃つ凱歌。きなこ、地下への階段の防災扉が閉じそうになっているのに気付く。
きなこ 「(叫ぶ) ホイさん！」
凱歌きなこを見る。きなこ、防災扉を指差す。降りて来る扉。凱歌、扉の隙間に滑り込む。
きなこ 「(凱歌を見ながら叫ぶ) こっちは、まかせて！」
凱歌頷き、階下へ駆け下りて行く。
入り口付近、1211とRDの撃ちあいになる。
きなこ、銃を構え、閉じた扉の前に立つ。

- コーの部屋

警備の男達を倒し、コーの部屋に入る凱歌。
デスクに座るコー。
コー 「珍しいな王凱歌、仕事が終わって真直ぐ戻って来るなんて...
もっとも、一人ではないようだが。上はすごい騒ぎだな。」
凱歌 「1211は、もう終わりだ。RDが襲撃してきた。もうすぐ、警察も乗り込んでくる。」
コー 「結局、お前は何もわかっていない。1211は動き続ける。」
コー、立ち上がって、デスクの前に出る。
凱歌 「...ここで、決着をつける。」
コー 「お前に私が倒せるのか？」
凱歌 「(コーを睨みながら) 倒す。」

コー 「そう怖い顔するな、凱歌ちゃん。(コー、凱歌に背中を向ける) そうだ、面白い話をしてやろう。ちょっとした昔話だ。」

凱歌 「...」

コー 「(以下の話の映像) 今から30年以上前の話だ。ある雪の晩に赤ん坊が2人生まれた。一人はこの世に産声を上げる事もなく、もう一人は、この世に生まれてはいけない子供だった。嘆き悲しむ、死んだ赤ん坊の父親と、途方に暮れる不義の子を産んだ女は偶然、産院の前で出会った。男は妻のために医者と呼ばれて来て、女は赤ん坊を捨てて来た。女はその子供を亡くした男に自分の赤ん坊を託した。「この子の名前は凱歌だ」と言い残して...。」

凱歌 「何が言いたいのだ。」

コー 「(凱歌の方を向く) その子がお前だ、王凱歌」

凱歌 「嘘だ。」

コー 「私の母親が亡くなる前に、そう私にいい残したのだよ。「お前には弟がいる」と、父親はお前の叔父さんだよ」と...」

凱歌 「でたらめだ...僕の母さんは...(回想、凱歌の頭を撫でる市江)」

コー 「お前は私の弟だ。お前には、天才的なスナイパーだった私の叔父、宋凱歌の血が流れている。」

凱歌 「そんな、馬鹿な...」

コー 「お前を探すのは簡単だった。お前は、父親譲りの才能で、射撃訓練所で天才の名を欲しいままにしていた。ただ、そこを逃げ出したのは誤算だったがな...」

凱歌 「やめろ！」

コー 「島村市江は、お前に優しくかったのか？血も繋がらない息子のために、殺し屋の母親にされてしまった気分は、どんなものだったのか...可哀相に...」

凱歌 「や...めろ」

コー 「お前は、自分の運命に、ずっと逆らえずに生きて来たんだ！」

凱歌 「...そんな話、信じられると思っているのか！」

凱歌、跳躍し、コーに蹴りを入れる。コー、跳躍しかわす。

コー 「信じる、信じないはお前の自由だ。だが、忘れるな、それが真実だ！」

コー、凱歌を気孔で飛ばす。壁に打ち付けられ床に落ちる、凱歌。起き上がり体勢を立て直す。

コー 「お前は、私の弟だ。」

凱歌 「違う！（構える）」

コー 「お前は、決してこの組織から逃れる事は出来ない。」

凱歌 「黙れ！（飛び掛る）」

二人の壮絶な格闘。
相打ちになって互いに壁に打ち付けられる。

- 本部一階

R Dと闘うきなこ。辺りは、銃声が響き、闘争が繰り広げられている。

李が闘いながら近付いてくる。

李 「(きなこに) 奴等、爆弾を仕掛けたわ！このビルごと吹き飛ばす気よ！早く外へ！」

李、ビルの外へ駆け出す。付近にいた人間も外へ逃げ出していく。きなこ、動かない。

きなこ 「ホイさん...ホイさん！」

きなこ、シャッターを開けようと体当たりする。

李 「(戻って来て) 何してるの！早く、行くわよ。」

きなこ 「彼が戻らない！」

李 「(シャッターを見る) 諦めなさい！もう間に合わないわ！」

きなこ 「(体当たりしながら) いや！」

李、じっときなこの姿を見てから、駆け去る。

きなこ、シャッターの前に座り込む。

李の声 「どきなさい。」

振り向くきなこ、李がバズーカを持って立っている。

李の方へ走るきなこ、シャッターを吹き飛ばす李。きなこ、中に駆け込む。

きなこ 「(振り向いて李に) ありがとう。」

李 「急ぎなさい。時間がない！」

きなこ、額き階段を駆け下りる。

- コーの部屋

入ってくるきなこ、凱歌を見つけ駆け寄る。

きなこ 「ホイさん！」

きなこ、凱歌を抱き起こす。うっすらと目を開ける凱歌。

きなこ 「しっかりして！もうすぐ爆発するわ。早くここから出ないと。」

凱歌、首を振り、微笑んで目を閉じる。きなこ、凱歌を立てせようと引っ張る。

きなこ 「逃げるのよ！」

凱歌 「もう、僕は無理だ...君は早く逃げろ...」

凱歌、きなこを突き飛ばすが、きなこ、すぐに駆け寄る。

きなこ 「そんなに元気なら、十分逃げられる！立って！」

凱歌 「...いいんだ、もう。(きなこを見つめる)...もし、母に逢ったら、伝えて欲しい...僕は...」

きなこ 「いやよ、(首を振って) 聞かない！（凱歌を見つめる)...生きて...生き延びて、自分で伝えるのよ。」

凱歌 「...コー村木に言われた...僕は母さんの子供じゃないって...」

きなこ 「うそ...」

凱歌 「僕は、コーの弟だと...」
きなこ 「そんなの、うそに決まってる...お母さんはいつだってあなたの事を思って...」
凱歌 「僕だって、嘘だと思いたい...けど...」
きなこ 「けど？」
凱歌 「...（あたりを見ながら） もういいから、早く行け！」
きなこ 「いやよ、あなたを残して行けるわけないでしょ！」
凱歌 「お願いだ...早く行ってくれ。これ以上、僕に...」
きなこ 「あなたと一緒に行く...そう決めたの。ずっと一緒にいる。これからも...ずっと...」
凱歌、きなこを見つめる。うつむいて微笑む。立ち上がるとうとする。
きなこ、凱歌を抱える。ふらふらと立ち上がる凱歌。きなこ、凱歌を支えて歩き出す。
コー 「待て！」
振り向ききなこ、立ち上がったコー村木。
コー 「逃げられると思っているのか、この私から」
きなこ、凱歌を庇いながらコーに拳銃を向ける。後退りするきなこ。
拳銃を二人に向けるコー、高笑いしながら、二人の足元を撃つ。じりじりと後ろへ下がるきなこ。
コー、拳銃をきなこの胸に向ける。発砲。瞬間、凱歌、きなこの前に出る。きなこをかばい撃たれる。
崩れ落ちる凱歌。
きなこ 「(叫ぶ)ホイさん！」
爆発音、炎に包まれる部屋。
コーの高笑いがあたりに響く。

- 本部の前(夜)

入り口付近、本部を見ている李。爆発する建物、爆風に手で顔を覆う。
李、炎上する建物を呆然と見ている。後ろから近付く趙、李の肩を叩く。
趙 「これで、1211は弱体化を免れない。リーダーを失えばRDは終わりだ。
全て君の、望みどおりになった。」
李、首を振り、炎を見つめる。
李 「私の望みどおり...何が？ 私はあなた達も一掃してしまいたい...」
趙 「相変わらず、手厳しい。しかし、めったな事は口にしない方が賢明だ。」
続々と集まる、パトカー、消防車、救急車。警官隊が取り囲む。
駆けつけたパトカー、中から降りてきた船木と市江。
炎を見つめる二人、船木、李に駆け寄る。
船木 「いったい、どうなっているんですか？円道寺君は？」
李 「彼女は...王凱歌と、まだ中に...」
船木 「えっ！この中に！そんな馬鹿な...」
市江 「(炎を見つめながら呟く)凱歌...」
ふらっと倒れそうになった市江を支える船木、崩れ落ちる建物を見つめる。

- きなこの部屋(夜)

掃除機をかけている美智。入り口にはな。
はな 「お姉ちゃんの部屋、お掃除してるの？」
美智 「もうすぐ、きなこ帰ってくるでしょ、だからね。」
はな 「あ、そうか、そうだよ。帰ってくるんだよね。あー、お土産楽しみだな。」
はな、出て行く。
美智、引っ掛けて机の上のぬいぐるみを落とす。
美智 「あら、あら」
美智、拾い上げ、埃を払って机の上に戻す。

- 紅龍店内(夜)

出前に行く準備をしている牛田。入ってきて、カウンターに座るはな。
厨房内、料理をする雁太郎。
はな 「さっきね、船木さんから電話があったの。ホイさんの、お母さん無事だったんだって。」
牛田 「ホントですか？それは、よかったですね。きなこさんも、一緒なんですよ？」
はな 「それがね、よくわからないの。船木さんに聞いたんだけど、なんか、そこには居なかったみたい。」
牛田 「いつ帰ってくるんでしょうね。」
はな 「いつになるのかな？ そうだ、みんな一緒に帰って来ればいいのにね！
ホイさんも、お母さんも、お姉ちゃんも！」
雁太郎、料理を皿に取ろうとしてこぼす。
雁太郎 「あっちー、あっち、たく、なにやってんだあー」
牛田、慌てて厨房へ入る。雁太郎の手を水道で冷やす。
牛田 「おやっさん、大丈夫ですか？」
はな 「もう、お父さんたら、大丈夫？危ないんだから、気をつけてよね。
まったく、「なにやってんだあー」って自分でしょ！（牛田に）ねえ。」
はな、救急箱を取り出す。
はな 「ほら、お父さんたら、手、見せて。大丈夫？」
雁太郎 「ああ、ちょっと、手が滑っただけだよ。ガタガタ騒ぐなって...」
雁太郎、牛田に渡された白いタオルで手を拭く。ぼんやりとタオルを見ている雁太郎。

- 本部の裏、林の中(夜)

本部の燃え盛る炎が木々の上に見える。

林の中、きなこを抱えて歩く凱歌。木にもたれ、座り込む。

凱歌の膝に抱かれているきなこ。頭から流れる血、動かない。

凱歌、肩で息をしながら、きなこの手をゆっくりと握りしめ、顔を見つめる。

きなこの唇を親指でなぞる凱歌。うつむいてきなこを抱き締める。

近付く足音、顔を上げる凱歌。李を見上げる。

凱歌「逮捕しに来たのか？」

李「さあ、...逮捕状、出ていたかしら...。とりあえず、お礼を言っておくわ。」

凱歌「あんたのためにした訳じゃない。」

李「そう、まあいいわ。ボスの部屋の地下にはシェルターがあったのね。(きなこを見る)彼女は？」

凱歌「生きてる...落ちた時、瓦礫で頭を打った。」

李「よかったわ。無事で...抜け道は、こっちに通じていたのね。」

凱歌「入り口は爆発で崩れた。」

凱歌、きなこを膝からゆっくりと下ろす。暫く顔を見つめて、立ち上がる。

李、凱歌の胸を驚いたように見つめる。視線に気付き、自分の胸を見る凱歌、胸に空く銃創。

胸を探り、携帯を取り出す凱歌、李に投げる。受け取る李、携帯に食い込む弾丸を見る。

李「随分、役にたったのね。」

凱歌「お陰で生き延びた...どうして...」

うつむいて、拳を握り締める凱歌。

李「死にたかったの？」

凱歌「...」

李「人間なんて、死ぬときは簡単に死ぬものよ。...だけど、あなたは生きているわ。

命があるなら、生きるべきなんでしょうね。」

凱歌「なんのために...」

李「...それは...自分で答えを探すしかないわ。...誰でもね。」

凱歌、きなこを見る。きなこの唇が微かに動く。

じっと、きなこを見ている凱歌、ゆっくり視線を戻す。

凱歌「(李に)...彼女を頼む。」

背中を向け歩き出す凱歌。

李「わかったわ。でも、何処に行くの、そんな身体で...」

凱歌「...」

足を引き摺りながら、歩く凱歌。夕闇の中に消えて行く。

E N D